

ミナンカバウ（西スマトラ）における ムハマディヤ支部の成立と発展（1）

利 光 正 文

【要 旨】

1912年11月18日、中部ジャワの古都ジョクジャカルタにおいて、K.H.アフマド・ダフランにより設立されたイスラーム改革団体ムハマディヤ(ムハンマドに従う者)は、オランダ植民地政庁により、1921年オランダ領東インドでの活動を認可された。前年、ジャワでの活動を認可されており、ジャワの各地にムハマディヤ支部が設立された。1925年、ジャワ以外の地では初めて、ミナンカバウ（西スマトラ）にムハマディヤ支部が誕生した。その後10年足らずの間に、ミナンカバウでは多数のムハマディヤ支部が設立され、ムハマディヤ運動は急速に発展する。なぜ西スマトラにおいて、ムハマディヤは支部拡大に成功したのか。ムハマディヤに関するいくつかの文献資料に依拠しながら、その原因を考察する。

【キーワード】

スタン・マンズル ハジ・ラスル カウム・ムダ
パダン・パンジャン支部 アイシャ

はじめに

インドネシアのイスラーム改革団体ムハマディヤ (Muhammadiyah ムハンマドに従う者) は、1912年アフマド・ダフラン (K.H. Ahmad Dahlan) により、中部ジャワの古都ジョクジャカルタに設立された。オランダ植民地政庁はムハマディヤの活動をジョクジャカルタ地区に限り1914年に認可、その後、1920年にはジャワ内での活動、そして翌21年にはオランダ領東インドでの活動を認めた。ジャワ以外の地いわゆる外領におけるムハマディヤ支部の誕生はミナンカバウ (Minangkabau) (西スマトラ) が最初であり、1920年代の半ばに設立されたムハマディヤ支部はやがてミナンカバウ全域に拡大、ミナンカバウでのムハマディヤ運動は広範に展開する。ミナンカバウは中央本部のある中部ジャワ以外ではムハマディヤの最も強い地域となり、ムハマディヤ運動の先進地ともなる。その事はやがて、ミナンカバウ出身でありミナンカバウのムハマディヤ運動の牽引車となったスタン・マンズル (A.R. Sutan Mansur) の第6代ムハマディヤ中央本部会長就任の有力な原因ともなる。スタン・マンズルは1953年から59年まで中央本部会長を務めたが、初代から5代までの会長はすべてジャワより選出されており、マンズルの会長就任は、ミナ

ンカバウという地がムハマディヤ運動の一大拠点であることを示す象徴的な出来事でもあった。それを起爆剤として、ミナンカバウのムハマディヤ運動は更なる発展を遂げた。ミナンカバウでのムハマディヤ支部の発展は、ムハマディヤがジャワ以外の外領に支部を拡大し、この組織が全国区となる上で大いに貢献したとも言える。小稿において、何故ミナンカバウがムハマディヤ運動の先進地となりえたのかを、支部成立の経過とその後の支部活動の発展の経緯をたどりながら考察を進めてゆく。

1 支部成立前史

ミナンカバウにいつ頃イスラームが伝来したかについては未だ明確ではないけれど、14世紀半ばにイスラームが入って来た[Hamka 1982 : 3]とする説がある。ミナンカバウの人々は、新しいもの、新しい宗教、新しい思想を受け容れるのが好きである [Mahmud Junus 1971 : 11]、との指摘は、イスラームの受容を考える上で参考となる。ミナンカバウのイスラーム化に大きな役割を果たしたのは、シェイク・ブルハヌッディン (Syekh Buruhanuddin) である。歴史的に知られている最初の宗教センターは、パダンの北で西海岸にある小さな町ウラカン (Ulakan) に設立され、このセンターの最初のウラマ (ulama) (ムスリム知識人) がブルハヌッディンであった。彼は1704年にウラカンで死んでおり、ミナンカバウの伝統の中では内陸部へ宗教を広げた最初のウラマと見なされている [Taufik Abdullah 1985 : 94]。ミナンカバウの母系制と父系制が濃厚なイスラームとがどのようにして斉合したかについては、加藤剛氏の研究がある[加藤 1980]。

さて、ミナンカバウのイスラーム社会は、19世紀に勃発したパドゥリ (Paderi) 戦争¹⁾ (1821~37年) により大きな変質をよぎなくされる。19世紀の初頭、ワッハーブ派の影響を受けたメッカ帰りの3人のウラマたち (パドゥリ派) がイスラーム改革の運動をミナンカバウで展開した。特に、彼らは、慣習化してしまっただけの様式や習慣をミナンカバウ地区のイスラームから一掃しようとした [ハッタ 1993 : 7]。このことは、ミナンカバウにおけるムスリムのイスラーム理解の不徹底さへの攻撃だけでなく、ミナンカバウ社会の伝統的な基層 (基盤) への脅威でもあった [Za'im Rais 1994 : 3]。ミナンカバウのムスリムは2つのグループに別れ、争った。即ち、パドゥリ派 (改革派) と慣習法派²⁾ (守旧派) である。オランダ人は両者の争いに介入し、ミナンカバウの奥地へ権力を拡大するために利用した [ハッタ 1993 : 8]。パドゥリ派に対するオランダ軍の勝利後、ミナンカバウでのオランダ支配が確立した。

パドゥリ派は壊滅したが、19世紀後半から20世紀前半にかけて、ミナンカバウ社会ではイスラーム改革の風潮は残存しており、特に、メッカに巡礼しその地で学んだ若者たちが影響を受けた改革思想と近代主義の思想が、ミナンカバウの人々にインパクトを与えるとともに、イスラームの解釈をめぐる「カウム・ムダ (Kaum Muda) (若い信徒=改革派)」と「カウム・トゥア (Kaum Tua) (年配の信徒=伝統派)」と呼ばれる人々がしのぎを削る。そして、「カウム・ムダ」を代表する人物の1人として、アブドゥル・カリム・アムルッラー (DR.H. Abdul Karim Amrullah) (通称ハジ・ラスル Haji Rasul) が登場する (以後ハジ・ラスルを使用)。彼は、ミナンカバウにおけるムハマディヤ支部の成立に重要な役割を果たしたので、その足跡をたどる。

ハジ・ラスルは1879年2月10日西スマトラのマニンジャウ (Maninjau) のスンガイ・バタン (Sungai Batang) 村においてシェイク・アムルッラー (Syekh Amurullah) の第3子として生まれた。幼年期、父よりコーラン読誦やアラビア語を習った後、スンガイ・ロタン (Sungai Rotan) で学習を続けた。ハジ・ラスルは16才から23才までの期間一時期中断 (一時帰国) しながらメッカでの勉強を継続、最終的に1906年メッカより帰国した [Hamka 1982 : 53-56]。翌年よ

り執筆活動を始め、1946年までに37の著作を上梓している [服部美奈 2002 : 050-056]。1912年ハジ・ラスルはミナンカバウの代表的な商業都市で交通の要衝でもあったパダン・パンジャン (Padang Panjang) のマドラサ (madrasa)³⁾ (学校) 「スラウ・ジュンバタン・ブシ (Surau Jambatan Besi)」の教師となった。1918年ハジ・ラスルはこの学校にクラス・学年制を導入した [Taufik Abdullah 1971 : 34-35]。ジュンバタン・ブシのスラウ⁴⁾では、生徒の日常生活のための組織が発展して、1918年「スマトラ・トゥワイリブ (スマトラの生徒)」が作られた。パラベック (Parabek) (ブキティンギ Bukittinggi) のスラウでの生徒の討論組織も「スマトラ・トゥワイリブ (Sumatra Thuwailib)」と名称変更し、両スラウが合体して1920年頃「スマトラ・タワリブ (Sumatra Thawalib)」が誕生した [西野節男 1991 : 34]。なお、タワリブは、大きな生徒を意味する。この2つのスラウに加え、パダン・ジャパン、マニンジャウ、バトゥ・サンカル (Batusangkar) の「カウム・ムダ」スラウもスマトラ・タワリブに合体した [Taufik Abdullah 1971 : 35-36]。しかし、パダン・パンジャンの「スマトラ・タワリブ」は1922年頃より、次第に共産主義の影響を受け始める。ミナンカバウにおける共産党の活動は、1920年頃に始まる [大木昌 1984 : 197]。そして、1923年共産党パダン・パンジャン地区委員会が組織される [増田与 1971 : 64]。1922年4月16日パダン・パンジャンのスマトラ・タワリブの生徒達は学内でミーティングを開き、政治活動への関与を議論した。このことが、宗教生徒による政治への関心の最初の表現であった [Taufik Abdullah 1971 : 36-37]。この生徒達に大きな影響力を行使したのがハジ・ダトゥ・バトゥアー (H.Datuk Batuah) であった。彼はメッカで学んだ後、パダン・パンジャン近郊の故郷コタ・ラワス (Kota Lawas) で宗教教師となり、パダン・パンジャンのスマトラ・タワリブの教師も務めた。そして、彼は共産主義に傾倒後、パダン・パンジャンのスマトラ・タワリブの学生組織の顧問となり、ハジ・ラスルの強力なライバルとなった。バトゥアーは、生徒達の政治活動に批判的であったラスルの立場を脅かし始めた。ハジ・ラスルは宗教生徒達が教師に対して敬意を表明していた伝統的な宗教教師の権威が土台から壊されたことを悟り、スマトラ・タワリブを辞職した [Ibid : 38-39]。この後、ミナンカバウの共産党は勢力を増し、やがて1926年の蜂起へと突き進んで行く。共産党が勢力を拡大する時期とムハマディヤがミナンカバウに支部を設立する時期はほぼ一致しており、両者の競い合いの後、蜂起失敗による共産党の壊滅と軌を一にして、ムハマディヤの支部が拡大してゆく。なお、蜂起の経過については、マクヴェイの研究 [Ruth T. McVey 1968] があるので、そちらを参考にされたい。

ところで、ムハマディヤのプロパガンダ (宣伝) がミナンカバウに入り始める1923年頃より、共産主義者達はムハマディヤに敵対意識を持ち、ムハマディヤが学校を運営するための補助金 (subsidi) をオランダ植民地政庁より受け取っていることを激しく批判した。そして、ムハマディヤを、1916年に設立された親オランダ組織 PEB (Politiek Ekonomische Bond 政経連合 [Deliar Noer 1973 : 335] の一派と見なし、PEB をもじり「オランダへ擦り寄り尻尾ふり (Penjilat Ekor Belanda)」と呼んだ [Hamka 1974 : 18]。当然、ムハマディヤはこの言いがかりに激しく反発し、各地のムハマディヤ会議で否定 [Ibid : 19]、両者の争いはエスカレートした。このような情勢の中、ハジ・ラスルはカウム・ムダに急速な影響力を持ちつつある共産主義勢力に対抗する手段として、ムハマディヤをミナンカバウに引き入れようと考えた [服部美奈 2001 : 84] [Alfian 1989 : 243]。そのためには、ムハマディヤをわが目で確かめる必要があった。

2 支部成立

1925年、ハジ・ラスルはジャワを訪問した。既に、教え子で娘婿であるスタン・マンスルが中部ジャワのプカロンガンにミナンカバウより移住後、その地のミナンカバウ人の間にイスラーム改革組織「ヌルル・イスラーム (Nurul Islam イスラームの光)」を組織、そのリーダーとなっていた。彼はその後ジョクジャカルタのムハマディヤ中央本部会長 K.H. アフマド・ダフランと親密になり、1922年ヌルル・イスラームをムハマディヤ・プカロンガン支部に衣替えし、ムハマディヤ運動の推進者の1人となった [利光正文 1993: 43]。ハジ・ラスルの訪問は、娘婿の招きによるものであった。ハジ・ラスルはムハマディヤ中央本部会長キヤイ・ハジ・イブラヒム (K. H. Ibrahim)⁵⁾、ハジ・ファフルディン (H. Fachroeddin)⁶⁾のような著名人と会見、ムハマディヤが運営する学校、病院、孤児院や貧者救済所等を見て回り、ムハマディヤ運動に関する知見を深めた [Islamic Centre Sumatera Barat 1981: 129]。パダン・パンジャンのスマトラ・タワリブを辞職後、ハジ・ラスルは故郷スガイ・バタン村に戻り、1924年10月彼の弟ハジ・ユスフ・アムルラー (Hadji Jusuf Amrullah) 及び政庁官吏を退職したダトゥック・ブンフル・ブサル (Datuk Penghulu Besar) とともに教育組織 (学校) 「サンディ・アマン (Sandi Aman 平和の礎)」を設立していた [Taufik Abdullah 1971: 72]。スタン・マンスルは義父のハジ・ラスルに、自身の経験に照らし、サンディ・アマンをムハマディヤ支部に衣替えすることを勧めた。ハジ・ラスルが帰郷後、3人の使節がマニンジャウに派遣された。マニンジャウ出身でプカロンガンに住む2人の商人ダトゥ・マジョレロ (H. Datuk Madjololo) とスタン・マラジョ (Sutan Maradjo)、同郷出身でジョクジャカルタに住むダトゥ・ナン・バレノ (Datuk Nan Bareno) の3名であった。3名の使者はハジ・ラスルの説得に成功し、サンディ・アマンは「マドラサ・イブティダイヤー (Madrasah Ibtidaijah)」と命名し、ムハマディヤの宗教学校となった [Alfian 1989: 245]。そして、ムハマディヤ・マニンジャウ (スガイ・バタン村) 支部は、1925年5月29日に成立した [Pimpinan Muhamadiyah Wilayah Sumatera Barat 1980: 3]。マニンジャウ支部役員は、支部委員長ダトゥック・ブンフル・ブサル、支部副委員長ダトゥック・シディ・バンダロ (Dt. Sidi Bandaro)、第1書記ザイヌッディン・カリ・パムンチャック (Zainuddin Kari Pamuncak)、第2書記イスマイル・スタン・ジャマリ (Ismail Sutan Jamaris)、会計スタン・パレンバン (Sutan Palembang)、委員12名であった [Ibid: 2]。

一方、パダン・パンジャンにおいては、1925年1月20日パダン・パンジャンのムスリム近代主義者達により「タブリグ・ムハマディヤ (Tabligh Muhammadijah ムハマディヤのイスラーム宣教)」という組織が設立された [Alfian 1989: 245]。支部成立とその後の状況について、しばらく機関誌『スアラ・ムハマディヤ (Souara Mouhammadijah ムハマディヤの声)』(以後 [S.M.] と略記) の記述を見ることとする。

1926年6月2日パダン・パンジャン、ガタンガン (Gatangan) のアブドゥル・カリム・アムルラーの家において、ネネック・ママー (nenek mamah)⁷⁾やウラマ達により、この町でコーランに基づく宗教を発展させるための1つの組織を持つためにはどのようにしたら良いのか議論する必要がある、との提案がなされた。この問題は、既に出席した人々により賛成が得られていた。議論の後、1つの組織が設立された。その後すぐにその組織はムハマディヤという名が付けられ、役員が選出された。

- 1 支部委員長 スタン・マンクタ (Soetan Mangkoeta)
- 2 支部副委員長 ダトゥック・サティ (Datoek Sati)

- 3 第1書記 ハジ・イサ (Hadji Isa)
 4 第2書記 アブドゥル・ワヒッド (H. Abdulwahid Er.)
 5 会計 バギンダ・サルディ (Baginda Sardi)
 委員 ハジ・ユスフ・アムルッラー (Hadji Joesoef Amuroellah)、ダトック・シパダ (Datoek Sipada)、ダトック・ランカヤ・ムリア (Datoek Rankaja Moelia)、ユスフ・モハマッド・ヌル (Joesoef Mohamad Noer)
 顧問 ハジ・ハルン (Hadji Haroen)

1926年6月7日月曜日、パダン・パンジャンの支部役員会の要請により、東インド・ムハマディヤ中央本部代表スタン・マンズルが、ムハマディヤ組織の機能と運営方法を役員と会員に説明するため、パダン・パンジャンを訪れた [S.M. 1926 : 330 - 331]。

スタン・マンズルのパダン・パンジャン到着後、6月24日の夜、ハジ・ラスルのスラウにおいてムハマディヤの会員約70名が出席して会員集会が開かれた。支部委員長の開式の言葉の後、彼は会の主宰(運営)をスタン・マンズルに委ねた。スタン・マンズルは会員達に対し、ムハマディヤの綱領と組織について詳しく説明している [Ibid : 325]。既に中部ジャワのプカロンガンにおいてムハマディヤ支部を立ち上げ、その地のムハマディヤ運動を軌道に乗せているスタン・マンズルであったので、出身地ミナンカバウでのムハマディヤ運動の基盤作りを中央本部は彼に期待した。ただその前に、プカロンガンでのムハマディヤ大会開催という大きな行事がスタン・マンズルに課せられていた。第16回ムハマディヤ大会は、1927年2月17日～27日までプカロンガンで開かれた。この大会にパダン・パンジャン支部代表として支部委員長スタン・マンクト(上記 [S.M.] ではマンクタとなっていたが、他の出版物ではマンクトとなっている)が出席した。この大会の中で、彼はパダン・パンジャンでのムハマディヤ運動に対する妨害を人々に話した。ムハマディヤの会員の家が焼き討ちに遭うという身の毛のよだつような事件や会員が刃物で刺されるというような幾つもの障害物の存在を訴えた。しかし、様々な障害はあるが、ムハマディヤの会員は挫けない、ということを強調するとともに、会員数がすでに2,444名に達していることを述べた [S.M. 1927 : 336]。ムハマディヤの会員に攻撃を仕掛けるものが誰なのかは明確にしえないけれども、前述の如く、共産主義者による攻撃は十分に考えられた。更に、西スマトラの中心都市パダンにおいても、同様の障害物が存在した。パダンのムハマディヤ支部は1930年に成立している [Departemen Pendidikan dan Kebudayaan 1980/1981 : 108] が、前年の [S.M.] にも次のような例が報告されている。パダンのムハマディヤがタブリグ集会を開いていると、慣習法派のリーダー達 (penghoeloe-penghoeloe adat) が殴りこみをかけて妨害し、同様の事件が4回も発生していた [S.M. 1929 : 52]。しかし、このような障害物にもめげず、ミナンカバウのムハマディヤ運動は展開されてゆく。

ところで、ムハマディヤをミナンカバウに導入した人物はハジ・ラスルであるが、彼は生涯ムハマディヤの会員とはならなかった。息子のハムカ (Hamka)⁸⁾によれば、ハジ・ラスルはPGAI (Persatuan Guru-Guru Agama Islam イスラーム教師協会) のメンバーであり、この組織は他の組織や団体への加入を禁止していたので、それに従った [Hamka 1982 : 150]、との理由である。しかしながら、真相は良く分からない。PGAIは1919年に設立され、翌年、オランダ植民地政庁より認可を受けている。この団体には、ジャミル・ジャンベック (Syekh M. Jamil Jambek)⁹⁾ (ブキティンギ) やザイヌッディン・ラバイ (Zainuddin Labai Al-Yunusi)¹⁰⁾ (パダン・パンジャン) を初めとする当時のミナンカバウを代表するウラマ達15名が名を連ねていた [Ibid : 104]。

さて、プカロンガンでムハマディヤ全国大会が開かれた後の4月15日、ムハマディヤ中央本部副会長ハジ・ファフルディンがミナンカバウを訪れた。彼はムハマディヤを代表する新進気鋭のリーダーの1人で、当時、精力的に東インドの各地を訪問してムハマディヤの宣伝を行い、ムハマディヤ運動の拡大に貢献していた。彼の訪問は、マニンジャウ(スンガイ・バタン)とパダン・パンジャンにおけるムハマディヤのための主たる勝利の宣伝であった [Taufik Abdullah 1971 : 88]。ハジ・ファフルディンの宣伝活動が奏功し、マニンジャウとパダン・パンジャンに続き、シマブル (Simaboer) (現バトゥサンカル Batusangkar) 支部が1927年7月27日に成立した [Wilayah Sumatera Barat 1980 : 4]。この年末、シマブルのムハマディヤ会員数は257名、女性組織アイシヤ (Aisijah) のそれは372名で、女性の方が多い。ちなみに、マニンジャウ支部の会員数は、ムハマディヤ1,556名、アイシヤ884名であった [Berita Tahoenan Moehammadijah Hindia Timoer 1927 : 43]。ハジ・ファフルディンが訪れた同じ月の4月、スタン・マンスルも中央本部の代表としてパダン・パンジャンに招かれており [Ibid : 116]、ムハマディヤ中央本部とミナンカバウ支部の緊密な関係が窺われる。スタン・マンスルはパダン・パンジャンに居住し、ミナンカバウのムハマディヤ支部基盤の確立に奔走する。彼は翌1928年、ムハマディヤ中央本部よりスマトラにおけるムハマディヤ運動の発展について報告するため、ジョクジャカルタに召還され、[Yusuf Abdullah Puar 1989 : 86-87]「スマトラにおけるイスラーム運動とムハマディヤ」と題する詳細な報告文を『ムハマディヤ年鑑 (Almanak Moehammadijah) 1927-28』に掲載している。その中で、ミナンカバウにおけるムハマディヤ支部成立の経緯について触れている。そして、文の最後の肩書きは、ムハマディヤ・スマトラ中央幹部代表としており [Almanak Moehammadijah 1927-28 : 248-254]、彼の思い入れが感じられる。

3 支部活動

ムハマディヤの組織には、支部 (tjabang) の下にグループ (groep)¹¹⁾が置かれていた。支部が成立するとグループも作られ、地区毎にきめの細かい活動が展開された。パダン・パンジャンでは、グループ毎の宣伝活動が頻繁に行われた。男性向けの宣伝として、プロパガンダ・ムハマディヤ (Propaganda Moehammadijah)、女性向けにプロパガンダ・アイシヤ (Propaganda Aisijah) が実施されている。(1) 1927年5月1日、ララス・ナン・パンジャン (Lalas nan Pandjang) 地区のガダン・スラウ (soerau Gadang) でのプロパガンダ・アイシヤ (2) 1927年5月1日～2日、同上会場においてプロパガンダ・ムハマディヤ (3) 1927年5月2日～3日、ジャオ (Djao) 地区のムハマッド・ジャミル氏 (Engkoe Sjech Moehammad Djamil) のスラウでのプロパガンダ・ムハマディヤ (4) 1927年5月3日、同上(3)の会場においてプロパガンダ・アイシヤ (5) 1927年5月3日～4日、バティプ・バル (Batipoeh Baroe) 地区のサイディ・マラノ氏 (Datoek Saidi Malano) の家でのプロパガンダ・ムハマディヤ (6) 同上(5)会場においてプロパガンダ・アイシヤ (7) 1927年5月4日～5日、ブンゴ・タンジュン (Boengo Tandjung) 地区のグノ氏 (女性) (Si Goeno) の家でのプロパガンダ・ムハマディヤ (8) 同上(7)会場においてプロパガンダ・アイシヤ [S.M. 1927 : 434-235]。

さて、ミナンカバウのムハマディヤ支部が取り組んだ他の活動の1つは、学校の創設である。即ち、コーラン付オランダ語原住民学校 (H.I.S. m/d Qoeran) (H.I.S. は Hollandsch Inlandsche School の略) は、1927年の末までに、マニンジャウ、パダン・パンジャン、シマブルの各支部に1校ずつ計3校が創立あるいは創立予定 (マニンジャウ) であった [Berita Tahoenan Moehammadijah Hindia Timoer 1927 : 83]。例えば、パダン・パンジャンのコーラン付 H.I.S. は1927年7

月1日に開校されており、生徒は男女共学で52名、教師のパルウォト氏(Toean Parwoto)とともに寄宿舎に住んでいた[S.M. 1927: 140]。それでこの学校では、運営資金をめぐり人々に寄付を呼びかけたところ、マニンジャウ(スンガイ・バタン)からf200(200フローリン)(200ルピア doea ratoes roepiah)¹²⁾の寄付が寄せられ、同じく、プカロンガンのヌルル・イスラームからも160f(seratoes enam poeloeh roepiah)の寄付が送られて来た[S.M. 1927: 140]。マニンジャウからの寄付については、11月20日ダトック・マジョレロ(Dt. Madjolelo)、ダトック・ナン・バレナ(Dt. Nan Barena)とハジ・ユスフ・アムルッラー(Hadji Joesoef Amurullah)の3人がパダン・パンジャンのH.I.S.を訪れ、f200の寄付金を渡している[Berita Tahoenan Moehammadijah Hindia Timoer 1927: 116-117]。その他の学校では、マニンジャウにおいて1927年の時点で3クラス162名の生徒(男54女108)及び2名の教師よりなる標準学校(Stanaardschool)¹³⁾3クラス123名の生徒(男51女72)及び3人の教師よりなるイブティダイヤー(Ibtidajiah)¹⁴⁾、7クラス160名の男子生徒及び4名の教師よりなるサナウィヤー(Tsanawijah)¹⁵⁾が存在した[Ibid: 161]。ただ、パダン・パンジャンにおける学校は、コーラン付H.I.S.以外の学校しか確認出来ないけれども、この時期は共産党の全国一斉蜂起が起こっていたので、その舞台の1つとなったミナンカバウでは、それどころではなかったと言えるかも知れない。この地での共産党蜂起は1927年の1月1日～9日にかけて発生し、逮捕者1万3,000名、内死刑16名、懲役4,500名、1,308名は流刑とされた[増田与 1971: 66-67]。服部美奈氏は、「当時はカウム・ムダによるディニア・スクールおよびタワリブ・スクールの拡大期であり、西洋型教育システムの重要性は量的にも影響力の上でも少なかった。」とのアルフィアンの説を引用している[服部美奈 2001: 85]。

次に、タブリグについて若干触れたい。[S.M.]によると、1927年9月25日、パダン・パンジャンのムハマディヤ・マドラサ(Madrasatoel Moehammadijah)において、タブリグ公開プロパガンダが支部委員長スタン・マンクトにより開催された。タブリグ責任者パキ・ムダ(Pakih Moeda)はコーラン第1章(Fatihah)の章句を唱え、会の開始を告げた。彼は続けて人々に次のように説いている。彼は言う「全人類の普段の生活と交流は崩壊の危機にあり、教育の有る者もそうでない者もそれぞれが生きる必要性を考えながらも自分の非力を痛感し、圧迫と苦しみを背負いながら生きている。その様な理由から、東インドにムハマディヤと言う組織が設立され、ジャワに74支部、そしてボルネオ、セレベス、そしてスマトラ全体に広がっている。加えて、イスラームの教授と学習を促進し喜びとする努力が行われている。更に、この組織では、イスラームを希求し生きる術とすることもインドネシア全域で展開している」と。また、アブドゥラー・カミル(Toean H. Abdullah Kamil)は、ムハマディヤにおける教育の重要性と人として教育されることの重要性を説明するとともに、信仰と神への思いは人間がこの世と来世での幸せを招来する上で重要である旨を強調した[S.M. 1927: 144]。

ところで、もう一つ重要な支部活動は、反「教師条例」闘争である。この闘争は、前述の如く1927年の蜂起によりインドネシア共産党が壊滅した翌年、ミナンカバウで繰り広げられている。教師条例(1925年)とは、家族以外にイスラームを教授する場合にはオランダ植民地政庁とレヘント(現住民理事官)の許可証が必要であり、テキストを前もって示すことが必要とされた[西野節男 1990: 76]。オランダ植民地政庁がこの教師条例をミナンカバウに導入しようとしているとの情報を1928年初頭に入手したスタン・マンスルは、早速、義理の父ハジ・ラスルに伝えた。以後、ハジ・ラスルの主導により、ミナンカバウのムハマディヤは支部を上げて反対運動を展開する。オランダ植民地政庁原住民問題担当官デ・フリース(Dr. de Vries)は、ハジ・ラスルをはじめとするミナンカバウのムハマディヤ幹部に対し、会見交渉を通じて説得と警告を行おうと

するが失敗に終わる [Alfian 1989 : 265-267]。2000人のウラマ達が参加した大規模な集会が開かれ [Islamic Centre Sumatera Barat 1981 : 131]、デ・フリースの眼前において拒絶決議が採択された [Alfian 1989 : 272]。1928年の教師条例反対運動は、ミナンカバウのカウム・ムダ層に対しムハマディヤの威信を高め、更なる支部拡大の要因になったと思われる。しかしながら、このことによりハジ・ラスルはオランダ当局より要注意人物としてマークされ、1941年西ジャワのスラブミ (Sukabumi) へ流刑された [Islamic Centre Sumatera Barat 1981 : 134]。

4 アイシヤ支部

1918年中央本部副会長ハジ・ムフタル (H. Muchtar) の肝いりでムハマディヤの女性組織として結成されたアイシヤは、1922年ムハマディヤから独立した組織となる [Solichin Salam 1965 : 87]。アイシヤの機関誌『スアラ・アイシヤ (Soeara 'Aisijjah アイシヤの声)』は、1926年に創刊された (以後 [S.A.] と略記) ([S.A. 1928 : 1]。ミナンカバウにおける最初のアイシヤ支部は、1926年初頭スガイ・バタン (マニンジャウ) で結成された [服部美奈 2001 : 86]。翌27年、マニンジャウのアイシヤ会員数は884人 (ムハマディヤ会員1,556人) であった。ただし、パダン・パンジャンの会員数は、記載されていない [Berita Tahoenan Moehammadijah Hindia Timoer 1927 : 43]。マニンジャウの H.I.S. は、1928年に創立されている。創立時の様子が [S.A.] に、次のように記されている。

アイシヤは強固に活動する

7月半ば、スガイ・バタン (マニンジャウ) のアイシヤは H.I.S. 開校のために、完成作業のための助力、トゥマヨ (Toemayo) からジョロン・ヌグリ (Djorong Negeri) の学校まで石運びを行った。千人を下らない人々が集まり、9時から2時まで何回も何回も石やじりを運んだ。実際、この作業は妻たちにとって辛いものであったが、それ(完成作業)にとって運ぶことが必要とされるならば、多くの労を惜しまない。このようにして、学校の塀や壁は創立のために十分となった。今、もう一つの仕事、ランガル (langgar 小礼拝所) を持ったアイシヤ事務所の建設のための寄付集めに取りかかっている。この仕事が早く成就することを祈念している [S.A. 1928 : 34]。

同じく、[S.A.] はブキティンギ (フォルト・デ・コック Fort de Kock) のアイシヤ支部設立についても記載している。1928年ブキティンギのアイシヤが設立されたが⁸、設立にあたっては、ブカロンガンのアイシヤ幹部ファトマー・ジャンベック (Fatmah Djambek) が5月にブキティンギを訪れ、支部設立に尽力した、と伝えている。アイシヤ会員はすでに118人おり、役員として、支部委員長ルカイヤー (Sitti Roekaijah)、支部副委員長ディニヤー (Sitti Dinijah)、第1書記ヌラニ (Sitti Noerani)、第2書記サリヤム (Sitti Salijam)、会計リウン (Sitti Lioen)、第1監査バーリヤー (Sitti Bahrijah)、第2監査ズフリヤー (Sitti Zoehrijah) を選出している。そして、アイシヤの設立が「ミナンカバウにおける女性の発展のためのモデルになることを願う。」と結んでいる [Ibid : 34-35]。ちなみに、ムハマディヤ・ブキティンギ支部は、同年7月20日に設立されている [Pimpinan Muhammadiyah Wilayah Sumatera Barat 1980 : 4]。従って、アイシヤ支部も同時期に設立されたものと思われる。更に、1927~28年にかけてのアイシヤについては、ミナンカバウのムハマディヤ支部役員名とともにアイシヤの役員名も『ムハマディヤ年鑑』に記載されている。例えば、パダン・パンジャン支部について見ると、創立時と同じく支部委員

長はスタン・マンクトであるが、支部副委員長はスタン・パムナン (Soetan Pamenan) に交代していた。同じく第1書記もハジ・ズブル (H. Zoeber) に交代。アイシヤに関しては、支部委員長ヌルリマー (Noerlimah)、支部副委員長ロシダー (Rosidah)、第1書記ジャニアル (Djanjar) 以下8名の役員がいる。シマブル支部についても、ムハマディヤの役員名とともにアイシヤの役員は、支部委員長ダラマ (Darama)、支部副委員長ラウイアー (Lawiah)、第1書記ミア (Miah) 以下8名の役員名がある。ただし、マニンジャウ支部はムハマディヤの役員のみで、アイシヤの役員は載せられていない [Almanak Moehammadijah 1927-1928 : 160-162]。更に、アイシヤでは、1930年以降ミナンカバウ全体のアイシヤを管轄する西スマトラ代表 (Pimpinan Aisiyah Sumatera Barat) を置いている。独立期までの代表は、マイムナー (Maimunah) (1930-1936)、ルカイヤー・ラシヤド (Rukaiyah Rasyad) (1936-1947)、ジャワニス・シャリフ (Djawanis Syarif) (1947-1949)、と続いた [Pimpinan Muhammadiyah Wilayah Sumatera Barat 1980 : 10]。

なお、ハジ・ラスルはアイシヤ女性達の活動に批判的であった。服部美奈氏によると、アイシヤ女性が会合に出席するために家を留守にし、家庭の外で社会活動を行うことや、男性も混じった人前での演説等を許可しない考えであった、とのことである [服部美奈 2001 : 87]。このようなことも、ハジ・ラスルをしてムハマディヤ加入に躊躇させた原因の一つであったかもしれない。

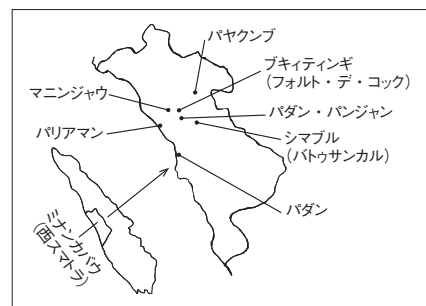
おわりに

1932年までにミナンカバウにおいて設立されたムハマディヤ支部及び支部候補 (bakal tjabang) は、以下の通りである。マニンジャウ支部 (1925年5月29日)、パダン・パンジャン支部 (1926年6月2日)、シマブル (バトゥサンカル) 支部 (1927年7月27日)、プキティンギ (フォルト・デ・コック) 支部 (1928年7月27日)、パリアマン支部 (Pariaman) (1929年10月25日)、パヤクンプ (Pajakoemboeh) 支部候補 (成立年は不明、しかし、1932年までには成立している [Berita Tahoenan Moehammadijah 1932 : 132])。パダン支部は1930年に設立されている [Departemen Pendidikan dan Kebudayaan 1980/1981 : 108] が、月日は確認できない。1932年には、ミナンカバウにおけるムハマディヤ支部・支部候補及びグループの数は、57に達した [Berita Tahoenan Moehammadijah 1932 : 130-134]。1932年時点での支部及び支部候補を図1で示す。

次に、1930年時のミナンカバウにおいて、ムハマディヤが運営していた学校は、『Berita 1930』によれば、以下の如くである (カッコ内の数字は学校数)。パダン・パンジャンでは、H.I.S.(1)、連鎖学校 (Schakelschool)¹⁶⁾ (1)、イブティダイヤー (2)、孤児学校 (Jatimschool)¹⁷⁾ (1)、マニンジャウでは、H.I.S.(1)、A.M.S.¹⁸⁾ (1)、M.S.(1)、イブティダイヤー (6)、シマブルでは、H.I.S.(1)、イブティダイヤー (1)、ウスタ (1)、となっていた [Berita 1930 : 45-46]。

以上、見てきたように、1925年ミナンカバウのマニンジャウにおいてムハマディヤ支部が最初に設立されて以後、1932年に至る間に多数の支部やグループが拡大し、ムハマディヤ運動の発展は顕著となったと言えよう。そして、この発展を決定

図1 ミナンカバウのムハマディヤ支部及び支部候補 (1932年)



づけたのは、1930年ブキティンギ（フォルト・デ・コック）における第19回ムハマディヤ大会開催である。ジャワ以外では初めてのムハマディヤ大会の開催は、ミナンカバウにとってこれからの発展を占う試金石であり、ミナンカバウにおけるムハマディヤ会員の総力を上げての取り組みであった。大会は成功し、ムハマディヤはミナンカバウで強力な足場を築いた。しかしながら、紙幅が尽きたので、大会の詳細については、稿を改めて考察したい。

最後に、ミナンカバウでのムハマディヤ支部の急速な拡大について、アルフィアンの見解を踏まえながら、検討する。アルフィアンはその理由を、以下のように指摘する。(1)ムハマディヤはカウム・ムダにおける全ての近代派ムスリムを統合するイニシアティブを取った。ムハマディヤの攻撃的な若きリーダー、スタン・マンクトを見出した。(2)反教師条例の仕掛け人としての重要な役割を果たしたため激烈に人気が増したハジ・ラスルを見出した。(3)ムハマディヤとスマトラ・タワリブ出身の人々との間に親密な関係を見出した。(4)初期のP.K.I.メンバーもムハマディヤの中に取り込んだ。(5)植民地当局は、何人かのムハマディヤの若くて攻撃的なリーダー達の強烈で高度な政治的スピーチに肝を冷やした。ハムカはインドネシア独立にとっての統合のプロパガンダを行ない、一方、スタン・マンクトはイスラームに基づくインドネシアの統合を普及させた。ジャワのムハマディヤは、明らかに非政治的で(当局に)忠誠を誓った運動と見なされたが、ミナンカバウは全くその逆であった [Alfian 1989: 275-277]。説得力のある指摘ではあるが、ミナンカバウにおけるムハマディヤの政治運動は1928年の反教師条例闘争においては高揚したけれども、その後については軌道修正が行われたと推測するのが妥当であろう。なぜなら、1930年スタン・マンスルがダエラ (Daerah 地域)・ミナンカバウのコンスル (Consul 全権代理)¹⁹⁾に就任し、軌道修正したと思われるからである。彼はジャワでのムハマディヤ運動を熟知していたし、オランダ植民地政庁との必要以上の摩擦は不必要と考えたであろうことは、想像がつく。ハジ・ラスルを除き、ミナンカバウのムハマディヤ・リーダー達全てが政庁の逮捕を免れているからである。この点についても、稿を改めて検討したい。更に、ミナンカバウ社会の持つ緊密な親族関係も看過すべきでないと思う。ハジ・ラスル、スタン・マンスル、ハムカの三人は緊密な親族関係の絆で行動していたし、マニンジャウのリーダーの中にも前述の如くハジ・ラスルの異母兄弟がいたからである。ともあれ、ミナンカバウにおけるムハマディヤ支部の急速な拡大と発展が、その後のムハマディヤ運動全体の発展に大きな刺激を与え、起爆剤となったことは確かであろう。

註

- (1) パドリ運動については、加藤剛氏の研究 [加藤剛 1980: 237-240] で概要を把握できるが、ムハマッド・ラジャブ『パドリ戦争』でその経過が非常に詳しく述べられている。パドリ戦争の中心的なリーダー、イマム・ボンジョルについて、オランダ軍が彼の最後の拠点ボンジョル村に攻め込んできて、捕えられたのが1837年8月16日の午前8時と、時間まで書かれている [Muhamad Rajab 1964: 401]。イマム・ボンジョルは、最終流刑地ミナハサで死んだ。現在、その地にインドネシアの国家英雄 (Pahlawan Nasional) として大きな記念碑が建てられている。
- (2) ミナンカバウ人の生活の基本理念となる慣習法 (adat) を重視する古い秩序の擁護者 [Taufik Abdullah 1985: 97]。
- (3) オランダ植民地政庁の近代学校にならったイスラームの宗教学校 [西野節男 1990: 76]。
- (4) イスラーム塾。本来は村の小さい礼拝所で、個人所有も多く、ここでイスラーム教育も行っている [ハッタ 1993: 593]。

- (5) 第2代ムハマディヤ中央本部会長（在任1923～1932年）。
- (6) ムハマディヤ中央本部副会長。ムハマディヤ支部拡大に貢献したが、40才で死亡。現在、インドネシアの民族独立英雄（Pahlawan Kemerdekaan Nasional）。
- (7) 母方のおじ。
- (8) 1908～1981年。ハジ・ラスルの息子。正式には、Haji Abdul Malik Karim Amrullah。通称ハムカ。ミナンカバウのムハマディヤ運動のリーダーとして、1945～50年ミナンカバウ地域のムハマディヤ全権代理（コンスル）となり、その後中央本部役員も務めた。歴史家、作家としても有名で、多くの著作を残しており、国家英雄に認定された。
- (9) 1860年ミナンカバウのブキティンギに生まれたイスラーム改革派リーダーの1人。ハジ・ラスルと友好的な関係が続け、イスラームの教義を広めるための種々の出版物を発行する会社を立ち上げて、改革思想の流布にも努めた [Deliar Noer 1971 : 35-37]。
- (10) 改革派ウラマのなかでも、特に女子教育の必要性を強調した人物 [服部美奈 2001 : 97]。
- (11) ムハマディヤ支部の下部組織で、ranting とも記述される。tjabang（支部）と ranting（グループ）の間に bakal tjabang（支部候補）がある。
- (12) 当時のムハマディヤ関連の資料には f（フローリン）＝ルピアと記述されている。
- (13) 現地式教育機関で、5年制の小学校 [世界教育史体系 6 1976 : 86]。
- (14) 6年制の初級宗教学校 [西野節男 1990 : 187]。
- (15) 3年制の中級宗教学校 [Ibid : 187]。
- (16) 3年制の現地式初等学校に接続する5年制の西洋式中等学校 [世界教育史体系 6 1976 : 86]。
- (17) 孤児院（Panti Asuhan）に併設された学校。詳細は不明。
- (18) 普通中等学校（Algemeene Middelbare School）。現在の高等学校にあたる。
- (19) コンスル制は、1930年ブキティンギでの第19回ムハマディヤ大会で導入された。

参考文献

- Alfian. 1989. Muhammadiyah—The Political Behavior of a Muslim Modernist Organization under Dutch Colonialism. Yogyakarta : Gadjah Mada University Press.
- 『Almanak Moehammadijah』 1346 (1927-1928).
- 『Berita』 1930.
- 『Berita Tahoenan Moehammadijah Hindia Timoer』 1927, Pengeroes Besar Moehammadijah, 1929.
- 『Berita Tahoenan Moehammadijah』 1932.
- Deliar Noer. 1973. The Modernist Muslim Movement in Indonesia 1900-1942. Singapore Kuala Lumpur. Oxford University Press. London New York.
- Departemen Pendidikan Dan Kebudayaan Proyek Inventarisasi Dan Dokumentasi Kebudayaan Daerah. 1980/1981. Sejarah Pendidikan Daerah Sumatera Barat.
- Hamka (Haji Abdul Karim Amrullah). 1974. Muhammadiyah di Minangkabau. Yayasan Nurul Islam (Panji Masyarakat) Jakarta.
- . 1982. Ayahku. —Riwayat Hidup Dr. H. Abdul Karim Amrullah dan Perjuangan Kaum Agama di Sumatera. Jakarta: UMMINDA.
- 服部美奈. 2001. 『インドネシアの近代女子教育—イスラーム改革運動のなかの女性』 勁草書房.
- . 2002. 「蘭領東インド期西スマトラ州のジャウイ文書：20世紀前半のイスラーム関連出版物を中心に」 『上智アジア学』 第20号. pp. 046-062.

- Islamic Centre Sumatera Barat 1981. *Riwayat Hidup dan Perjuangan 20 Ulama Besar Sumatera Barat*.
- 加藤剛. 1980. 「矛と盾?—ミナンカバウ社会にみるイスラームと母系制の関係について」 京都大学東南アジア研究センター 『東南アジア研究』 第18巻2号, pp. 222–256.
- Mahmud Junus. 1971. *Sedjarah Islam di Minangkabau*. C.V. AL-Hidajah Djakarta.
- 増田与. 1971. 『インドネシア現代史』 中央公論社.
- モハマッド・ハッタ (大谷正彦訳). 1993. 『ハッタ回想録』 株式会社めこん.
- Muhamad Radjab. 1964. *Perang Paderi*. P.N. Balai Pustaka. Djakarta.
- 西野節男. 1990. 『インドネシアのイスラーム教育』 勁草書房.
- . 1991. 「西スマトラのイスラーム教育 (1) —スマトラ・タワリブ学校の事例—」 『アジア・アフリカ研究所研究年報』 (26) : pp. 33–52.
- 大木昌. 1984. 『インドネシア社会経済史研究』 勁草書房.
- Pemandangan Alam Islam dan Muhammadiyah 1932–1933.
- Pimpinan Muhammadiyah Wilayah Sumatera Barat. 1980. *Mengenal Muhammadiyah Sumatera Barat*.
- Ruth T. McVey. 1968. *The Rise of Indonesian Communism*. Cornell University Press. Ithaca, New York.
- 『Soeara 'Aisijjah』 1928. No. 3 (イスラーム暦3月).
- 『Soeara Moehammadijah』 1926. 7月号 No. 1. 1927. 7月号. 11月号. 1929. 7月号 No. 1–2.
- Solichin Salam. 1965. *Muhammadijah dan Kebangunan Islam di Indonesia*. N.V. MEGA DJAKARTA.
- Taufik Addullah. 1971. *Schools and Politics: the Kaum Muda Movement in West Sumatra (1927–1933)*, (South-east Asia Program, Modern Indoneisa Project, Monograph Series), Cornell University.
- . 1985. *Adat and Islam: An Examination of Conflict in Minangkabau*. Institute of Southeast Asian Studies, Heng Mui Keng Terrace, Pasisir Panjang, Singapore.
- 利光正文. 1993. 「中部ジャワ北岸のムハマディヤ運動」 『史学研究』 第203号 : pp. 42–59.
- 戸田金一. 1976. 「インドネシア教育史」 (梅根悟 監修 『世界教育史体系6 東南アジア教育史』 講談社. pp. 20–145.
- Yusuf Abdullah Puar. 1989. *Perjuangan dan Pengabdian Muhammadiyah*. Pustaka Antara PT – JAKARTA.
- Za'im Rais. 1994. *The Minangkabau Traditionaists' Response to the Modernist Movement*. Institute of Islamic Studies, McGill University, Montreal, Canada, (Master of Arts).